



茶業が抱える多くの課題 産地賞が町にもたらすものは

茶価の低迷による生産者の収益減と後継者不足など多くの課題を抱える茶業界。
日頃から農家を支援する中川根営農経済事業所の松浦雅晃事業所長に話を聞きました。



産地賞の受賞は大変喜ばしいことです。農家の方々を中心に、茶業関係者の努力が実を結んだ結果だと感じています。一般の方たちには、この荣誉の偉大さや重要さを感じて欲しい、そのために我々農協としても、行政や茶商などの関係団体と協力して、盛り上げていきたいと思えます。

しかし、川根本町に限らず、静岡県の茶業界は茶価格の低迷による生産者の収益減、そのことに伴う後継者不足、放棄茶畑の増加など課題は少なくありません。また、消費者の食生活の変化に伴う「お茶を飲む習慣の変化」も課題の一つに挙げられます。若い世代の中には、急須でお茶をい入れて飲むという人が少なくなり、手軽に飲める

ペットボトル飲料の方が一般的になりました。リーフ茶の需要がペットボトルのお茶よりも少ない現在の市場では、農家がどんなに質の良いお茶を生産しても適正な価格で販売されない現状があるのです。このような状況を一産地の力で変えることは大変難しく、農協としても歯がゆさを感じています。

それでも、今回の産地賞受賞の話題は、そんな茶業の抱える課題を改めて見つめ直す良い機会になるのではないかと思っています。

大切なことは、この町だけでなく全国規模で産地が協力して茶業の再生に取り組むこと。その中で、川根茶の良さを飲む人に伝え続けること、受け継いできた川根茶の伝統と技術を継承して次世代の若い農家につないでいくことが重要です。

我々も茶業最盛期のような茶価格に戻ることを期待しながら、就農希望者が就農しやすく、既存の農業者が安心して働ける環境作りを使命感を持って取り組んでいきたいと思えます。

茶時の風景

新緑が芽吹き、お茶の爽やかな香りが町を包んだ五月初旬。
町内では、各地で茶の摘採、製造が行われました。

- 1 製茶工場内の様子。製造が品質を左右します。
- 2 摘採で活躍するお茶摘みさんの賑やかな声は風物詩です。
- 3 茶刈機の音も各地から聞こえます。
- 4 一芯二葉で丁寧に摘まれるお茶。



おも 特集「想い」 —守り継がれる茶業—

本町の基幹産業の一つである「茶業」。後継者となる人が少なく、未来にその伝統や技術を引き継ぐことができるかが課題です。本号では今年の全国茶品評会で「産地賞」を受賞したことを受け、茶業関係者の想いに迫り、川根茶を未来に残すためには何ができるか考えます。

7年ぶりの快挙。産地賞受賞

今年、鹿児島県で行われた審査会において本町が普通煎茶4^キの部で「産地賞」を受賞しました。新型コロナウイルス感染症の暗い影を一掃する明るい話題が町にもたらされました。

日本茶業の将来を展望し、茶業の一層の発展のために行われる全国茶品評会は今年で74回目の開催となりました。鹿児島県南九州市で行われた審査会には、全国から900点以上が出品され、普通煎茶4^キの部で、相藤農園・相藤直紀さんが最高位の農林水産大臣賞を獲得。他の出品者も上位入賞を果たすなど華々しい成績を収めました。入賞者の方たちに話を伺うと皆さん口々に「自分の力だけでは到底及ばない名誉。支援してくれた関係者の皆さんに感謝したい」と笑顔で振り返りました。

また、成績優秀な市町村に贈られる「産地賞」についても、普通煎茶4^キの部で、平成25年以来7年ぶりとなる「日本一」の栄冠を獲得しました。

新型コロナウイルス感染症による影響が産地を襲い、暗い影を落としていきましたが、今回、その雰囲気吹き飛ばし、再び川根茶が高品質であることを証明するこの上ない話題に、町は喜びで包まれました。

【第74回全国茶品評会 審査会結果】

普通煎茶4 ^キ の部・1等		普通煎茶10 ^キ の部・1等	
1席	農林水産大臣賞 相藤農園 相藤 直紀 さん	6席	全国茶生産団体連合会会長賞 丹野園 丹野 浩之 さん
2席	農林水産省生産局長賞 川崎 好和 さん		
4席	全国茶生産団体連合会会長賞 相藤園 相藤 令治 さん		